
超獣機神ダンクーガStrikerS

sibugaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超獣機神ダンクーガStrikers

【コード】

N2000Q

【作者名】

sibugaki

【あらすじ】

J S事件が終結して間も無くの頃、フェイトはスカリエツィの基地で四機のマシンを発見する
そしてそれ選ばれたのは若きフォワードメンバーの四人であった
しかしそれがかのJ S事件以外にも及ぶ戦いの幕開けになるとは

超獣機神ダンクーガStrikers

始まります

目覚める野生（前書き）

アニメ「ダンクーガ」を見て閃いた作品です
どうぞ

目覚める野生

J S事件が機動六課の手により終結してまだその傷跡が癒えない頃、機動六課スターズ分隊隊長であり執務官であるフェイト・テスタロツサは今かのJ S事件の首謀者事「ジェイル・スカリエッティ」の基地内を調査していた
勿論一人ではない

今基地内には数十名にも及ぶ局員達が捜査を行っていた

事件こそ集結したもののあの科学者の事だ、きっと二重三重の手を持つているに違いない

そう思えたからだ

フェイト達はその為この基地を念入りに捜査していたのだ

怪しい痕跡がまだ残っているかも知れない

そう思えたのだ

だが、フェイトの思惑は外れ、中にはその痕跡は影も形も無かった
(取り越し苦労だったみたいね)

内心ホツとするフェイトであったが、それはある局員の声によりかき消された

「フェイト執務官！こっちにきて下さい」

「どうしたの？」

「これを・・・」

「こ・・・これは！」

フェイトの前にあつたのは四機のマシンであった

一機は小型飛行機

二機は小型重戦車

一機は大型重戦車

それらが並べられていた

そしてその四機は何処か獣を思わせるデザインが施されていた

「これって・・・質量兵器！」

「スカリエツティ・・・お前はこれを使って一体何を企んでいたの？」
フエイトは目の前に佇む四機の質量兵器を見てそう呟いていた
だが、これが後の壮絶な戦いの幕開けになるとは、この時誰も知らないでいた

『超獣機神ダンクーガStrikers』

第1話 『目覚める野性』

その後、四機の質量兵器はそのまま管理局に護送され、念入りに調査された

だが、それらは全てがブラックボックス並の技術で作られており解析は困難を極めていた

「あれがフェイトちゃんの見つけた質量兵器？」

「うん、そうだよ」

フェイトは隣に居た女性に答えた

白の制服を纏い栗色の長い髪をサイドで束ねた美しい女性である

彼女は高町なのは

かつて機動六課の教官を務めていた事があり現在も戦技教官を勤めている

そんな彼女がフェイトの通信を受けてやってきたのだ

「スカリエッティはこれについて何か言ってた？」

「何も・・・只、変な事を言ってたよ」

「何？」

なのは興味深そうに聞く

それにフェイトが答える

「『あれを扱えるのは本当の野生を持つ者だけ』だって」

「野生？なんだろうねそれ？」

「分からない」

最早二人はお手上げ状態であった

それはまた調査を行っている局員達も同じであった
全くの手付かずだったのだ

コクピット回りや装甲、機械内部など等しらみつぶしに調べたのだから一向に駄目である

「それで、この四機はどうするの？」

「基本的には廃棄処分にするつもりだよ。こんな危険な者があつち

や危ないしね」

「そうだね」

なのはもフェイトのその判断は賢明だと思った

「そういえば今日此処にフォワードメンバーの四人が来るよ」

「え？どうして？」

「何か皆四機のマシンを見せたら興味を示しちゃって」

「ニヤハハ、やっぱりあの子達もまだ子供だね」

「そうだね」

四人の来る理由に二人は笑みを浮かべた

懐かしい

その思いが駆け巡った

もうすぐ機動六課は解散し、皆それぞれの道に行く事になる

今はその準備に忙しい状態なのだ

その為中々会えないで居る

そんな四人とこうしてまた会えるのだ

嬉しくない筈が無い

そう思っていると言をすれば・・・である

「なのはさんにフェイトさん」

「お久しぶりです」

「こうして会うのも久しぶりですね」

「お元気そうで何よりです」

其処には四人の男女が居た

青のショートカットの少女スバル・ナカジマ

赤い髪をした少年エリオ・モンディアル

桜色の髪をし、肩に幼竜を乗せた少女キャロル・ルシエ

そしてオレンジの髪を両サイドで束ねた髪をした少女ティアナ・ラ

ンスター

以上の四名である

「本当、久しぶりだね」

「皆元気？」

二人の言葉に四人は頷く

そして窓越しに見える四機のマシンを見た

「へえ、あれがスカリエッツィの基地で見つかったマシンなんですか？」

「うわあ、カッコ良い！ねえねえ、あれ乗れないのかなあ？」

「スバル、あなたは相変わらず馬鹿丸出しねえ」

エリオがものめずらしそうな目で見てスバルが目を輝かせて言う
それにティアナが頭を抱えていた

「うーん、良いけど多分動かないよ」

「あれ私達も試したけど全然動かないんだ」

「なあんだ、壊れてるんだ」

「でも、それじゃどうしてあんなに念入りに調べてるんですか？」
キャラコが聞く

それにフェイトが答えた

「うん、きつとあのスカリエッツィの事だからもしかしたらあのマシンには何か秘密があるかも知れないと思ってね」

やはり念入りに調査すべきであると思っっているようだ

「ねえねえ、早速あれ見に行こうよお」

「ちよ、分かったから引つ張るな！お前馬鹿力なんだから」

スバルに手を引つ張られる形でティアナも向かう

それを笑みを浮かべながらエリオとキャラコも続く

それを微笑ましくなのはとフェイトは見ている

「うわあ、大きい」

スバルは今四機のマシンの前に立っていた
しかもスバルが見ていたのはその中でも一際大きな大型重戦車であ
った

背中には巨大な砲台が置かれており明らかに鈍重で大火力を誇つて
いそうであった

「でもどうしてスカリエツティはこれをJS事件で使わなかったの
かしら？」

ティアナは小型戦闘機の前に立ってそう呟いていた
確かにそうである

これ程の兵器を持っているのならば何故使わなかったのか
もし使っていればもしかしたら機動六課は負けていたかもしれない
嫌、それは無いか

たかが四機のマシンで戦況を覆せる筈がない
そう思えたからだ

「とりあえずどうします？」

「うーん、まあ調査の手伝いがてらコクピットを見てみましょう」
「やったあ！」

ティアナの提案にスバルが喜ぶ

「何だか、スバルさん嬉しそうですね」

「あいつこういうの好きだからねえ」

半ば呆れながら四人はそれぞれのマシンに乗り込む
中はかなり複雑であり複数のボタンがあった
それこそどれがどれだか迷う程である

「あ、ねえねえ、この赤いボタンなんだろう？」

スバルはふとその中で一際目立つ赤いボタンを見た
それをティアナ達も見た

「何でしょう？これ」

「私も気になります。何だかこれだけ他とは違ってますし」

「うん、何か嫌な予感しかしない気がするんだけど」
「もしかしてこれが起動スイッチだったりして？」
「あのねえ、もしそうならとっくに起動してるでしょうが！」
スバルの提案を一蹴するティアナ
それにスバルがテヘツと舌を出す
「まあ、どうせ動かないんだしとりあえず押してみるか」
「流石ティア、物分り良い！」
「うっさい」
スバルの言葉にそう返し言葉を上げながらも四人は同時に赤いボタンを押した
すると、さっきまで開いていたハッチが突如一人でに仕舞ってしまったのだ
「え？」
「し、閉まった！」
「もしかして罠だったんでしょか？」
「あ、開かないですよ！」
完全にパニックになっていた
そしてそれは上から見ていたなのは、フェイトも同じであった
「スバル！ティアナ！」
「エリオ！キャロ！」
二人はすぐさまバリアジャケットを纏いマシンの元へ降り立った
下では先ほどまで調査を行っていた局員達が慌てていた
「ハッチは開かないんですか？」
「駄目です！外部からの操作を受け付けません！」
局員の悲鳴が響く
「フェイトちゃん！」
「うん、ちよつと乱暴だけどやるしかないね」
二人はそう言っただけのデバイスを構える
開閉が無理ならこじ開けるしかない
そう言う考えであったのだ

そして小型戦闘機は変形こそしなかったがその機体には七色のオーラが纏われていた

そして野生に目覚めた四機が突如その場で暴れ出したのだ

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

獅子が雄たけびを上げて付近の壁を切り裂く

『ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

黒豹が回りにあったパイプなどを噛み千切る

『パオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

巨大な像が付近の計器などを踏み潰し壁を叩き壊す

「スバル！ティアナ！一体どうしたの？」

「エリオ！キャロ！早くそれから降りて！それは危険よ！」

なのはとフェイトが必死に呼びかけるも四人はそれには全く応じなかった

その機体の中から聞こえて来るのは只四人の雄たけびであった

今の四人は正に理性を失くした獣であった

四機が更に激しく暴れ回る

既に施設内は滅茶苦茶になっていた

なのはとフェイトも仕方なく迎撃に移る

だが、二人の放つ魔弾は四機のマシンには全く効き目が無かった

装甲で防いでる訳ではない

四機の中から滲み出ている奇妙なオーラが魔弾を跳ね返しているのだ

「もしかして・・・これがスカリエッティの言っていた野生？」

「それじゃ、ティアナ達はその素質を持っているって事？」

二人は驚愕した

あのティアナ達があの化け物のようなマシンを扱う素質があったとはと、その時であった

突如四機のマシンはまるで糸の切れた人形のようにその場に倒れてしまったのだ

ズシンと地響きが唸る

なのはとフェイトは疑問に思い四機に近づく

すると中では意識を失った四人が居た

どうやら気絶した為に機械も停止したのだろう

だが、これで二人は少なくとも理解出来た事がある

それは、この四機はとても危険な存在であると言っ事である

目覚める野生（後書き）

次回予告

ティアナ

「結局四機のマシンは廃棄処分が決定した
でもそんな私達の元に巨大な敵が現れた
今は四の五の言ってる場合じゃない
私達があればに乗って戦わないと！」

次回、超獣機神ダンクーガStrikers
『結成、獣戦機隊』

やってやるぜ！」

第2話 結成、獣戦機隊（前書き）

かなり間が空いてしまい申し訳ないです

第2話 結成、獣戦機隊

一体何がどうなってるんだ？

そう思わせる光景であった

それは久しぶりに訪れたフォワードメンバーが調査の為に四機の謎のロボットに搭乗した事から始まったのだ

其処でなにをしたのかはいまだに分からないが、とにかくいままでも動かなかった四機のロボットが突然動き出したのだ

しかも形態を突如獣とも思える形態に変形させて格納庫内で縦横無尽に暴れまわったのだ

なのはとフェイトや局員達も応戦するが彼女等の攻撃は四機のロボットには全く通じず、ただただ四機が止まるのを祈るだけであった。すると突如として四機は活動を停止し、その場に倒れたのであった。そして今では、倒れた四機のマシンから気を失ったフォワードメンバーの四人が局員達の手により外に出されてそのまま医務室に運ばれていた

それを見ていたなのは、フェイトの二人は顔立ちが暗かったぞっとしていたのだ

もしスカリエッティがあ四機を本格的に投入したら・・・最悪機動六課は負けていたかも知れない
そう思えたのだ

「あゝ、酷い目にあつたわゝ」

ティアナは呟いていた

その横にはスバル、エリオ、キャラの三人も居た

四人は先に謎の質量兵器に乗り込みその後自身の中に何かが目覚める思いがしたと思つた途端突如四人は暴走し当たりの施設を破壊しまわつたのだ

しかし、その後四人は気を失いそれと同時に機体は機能を停止し動かなくなつてしまつたのだ

そして、今四人はこうして医務室で目を覚ましたのである

「全く、スバル！あんたのせいで酷い目にあつたじゃないの！」

「うゝ、ゴメゝン、ティアゝ」

ジト目で睨んで怒るティアナにスバルは頭を下げて必死に謝つていたそんなティアナを止めるようにエリオとキャラが止めに入る

「ニヤハハ、皆元気そうだね」

「あ、なのはさん！」

何時の間にか医務室の扉を開けてなのはとフェイトが見に来たのであつた

だが、思いのほか四人が元気なので安心したようである

「それで、なのはさん・・・あの質量兵器はどうするんですか？」

「あれは上からの決定で処分する事が決まつたよ。そもそも質量兵器が此処ミッドチルダにある事態危ないのにあんなに大暴れしたんだから当然だけどね」

「えゝ、折角カツコよかつたのにゝ」

スバルは何故か残念そうな顔をしていた
そんなスバルにティアナが断罪チョコップを食らわせる

「あんだねえ！またあんな恐ろしい目に会いたいの？」
「うゝ、だつてゝ」

涙目で抗議しようとしたがティアナの一睨みで黙り込んだ
余程怖かったのだろう

隣で見ていたエリオとキャロも少しだが黙りこんでしまった
それにはティアナは驚いた

どうしたのだろうか？

自分の睨みを見て驚くのはスバル位である

それが隣に居たエリオとキャロにまで影響を及ぼすとは一体どうしてなのだろうか？

疑問に思ったが特に気にしないで置く事にした

その頃、ミッドチルダのとある市街

その市街の上空に突如空間の歪みが起こった
何だろうか？

そう思つて空を待ち行く人達が見た

するとその空間の歪みからは数体のロボットと数十機の小型円盤が

現れたのだ

そして、その中央には異様な姿をした化け物を思わせるロボットが居た

ロボットと円盤が突如町を破壊し始めた

ロボットの肩から放たれる赤白いレーザーが街を焼き

円盤から放たれる怪光線が車を吹き飛ばし道を砕く

それに恐れを感じた町の人々が逃げ惑う

謎の敵の襲撃の知らせを聞きつけた管理局は当然迎撃の為局員を出撃させる

大勢の武装局員が巨大ロボットと円盤を発見し攻撃を開始する

局員達の持っていたデバイスから数発の魔弾が放たれる

一人では数発だが何十人も居る為その数は何十発にも及ぶのだ

その何十発の魔弾が全て巨大ロボットと円盤に当たり爆煙が辺りを包み込む

「やったか？」

とある武装局員がそう呟いた

だが、その直後赤白いレーザーが局員達を襲う

謎の怪ロボットの襲撃は機動六課元メンバーにも知らされた

「皆聞いて！今市街に謎の巨大ロボットが現れたみたいなの」
「それで、武装局員の皆も迎撃に行ったんだけど、返り討ちにあつたみたいなの！だから私達がその迎撃に向かう事になったわ」
「きよ、巨大ロボット！」

信じられない言葉であつた

巨大ロボットなど今まで見た事がないのだ

先の四機のマシンですら信じられないと思つていたのに今度は町を破壊する謎の怪ロボットである

怪ロボットは局員達の攻撃にビクともせず破壊の限りを尽くす

その為被害は甚大な物となつていた

ビルは破壊され道は踏み潰され局員達は次々と倒れていく

「このままじゃ町は壊滅だわ」

「皆、大丈夫だよな？」

フエイトが四人に問う

それに四人は当然の如く頷く

それを見た二人は笑顔になりすぐに出撃の準備に取り掛かる

そんな時であつた、四人の脳裏にまたあの声が響いた

『目覚めよ・・・目覚めよ・・・獣の戦士達よ』

「うー！」

「ま、またあの声だ・・・」

「あ・・・頭が・・・」

「うう・・・」

その声を聞いた途端四人は頭を抱える

激しい頭痛が襲っているのだ

そして、またあの時のような赤いオーラが四人を包み込む

「皆!」

「これって・・・あの時と同じ・・・」

なのはとフェイトは驚愕した

そうだ、あの時の暴走した時と全く同じ現象が起こっているのだ
赤いオーラを纏った四人はゆっくりと目を開く
その目は皆赤い色をしていた

「行こう・・・獣戦機が待ってる」

ティアナがそう言うと三人は頷く

そして、まるで導かれるかのようにあの時の場所、獣戦機のある格納庫へ向かったのだ

「一体・・・どうしたの?」

「分からない・・・でも、またあれに乗る気なんじゃ」

「止めなきゃ!」

「うん」

二人は頷いて四人の後を追いかけてようと部屋を出た
その直後であった

二人の前に突如として映像通信が入ったのだ

『待ちたまえ』

「あ!」

「お前は・・・」

二人はその映像に映った男を見て驚愕した

何故ならこの男こそかつて機動六課が戦った事件の首謀者であるのだ
その名は「ジェイル・スカリエッティ」高次元犯罪者であり数多くの命を弄んだ重犯罪者である
しかし府に落ちない

この男は現在牢獄におりこうして通信を送れるはずがないのだ

「一体何の用？」

『冷たいねえ・・・折角君達に耳寄りな情報を提供してあげようと思つて来たと言つのに』

「いらぬわ！それより、どうして貴方は通信を遅れるの？」

『君達が捕らえたのは私のコピーなのだよ。本物の私はちゃんと活動をしているよ』

「なっ！」

驚愕の事実であつた

まさかあの捕らえたスカリエッティが偽者であつたとは
そんな驚く二人の前でスカリエッティは続ける

『町に現れたあの巨大ロボットは君達の力では手に負えない代物だよ。あれに勝てるのは君達が発見した四機の獣戦機しかない』

「ちよつと待つて、それじゃどうしてJS事件の時にあれを使わなかつたの？あれを使えば貴方は勝てた筈なのに・・・」

『フツ、分かつてないなあ・・・そもそもJS事件は君達に勝つのが目的ではないのだよ』

笑みを浮かべてスカリエッティは言う

勝つのが目的ではない

では真の目的は一体何なのか

その答えはすぐに言い渡された

『J S事件の真の目的・・・それは、あの四機の獣戦機を乗りこなせる者を・・・獣の魂を持つ者を探すのが目的だったのだよ』

「獣戦機の乗り手を探す・・・只それだけの為に・・・お前は多くの命を犠牲にしてきたと言うの？」

『大事の前の小事さ・・・人類全体の存続を考えたらたかが100人の命など安い者だろう？』

「ふざけるな！そんな理屈が通る筈がない」

フエイトは激怒した

理由はどうあれこの男は多くの命を奪ってきた

それが許せないのだ

だが、怒るフエイトにスカリエッティは全く答えていない

『気持ちは分かるが、君達で果たしてあの怪ロボットに勝てるのかい？』

「やってみなければ分からないよ」

『嫌、断言するよ・・・君達ではあれには勝てない・・・だから私はあの四機のマシンを発掘したのだよ』

四人はそれぞれのマシンに搭乗していた

慣れた手つきで機械を操作する

コンソールに光が灯りエンジンの起動する音が響き渡る

機体が振動し始める

動き出した証拠である

操縦桿を通してマシンのエネルギーが伝わってくるのを四人は感じていた

まるで野獣の如き荒々しいエネルギーである

そしてそれよ四人は全身に浴びていたのだ

「皆・・・分かってるわね？」

「町で暴れてる怪ロボットを叩き潰す」

「上手く制御してみますよ」

「私も・・・やってみます」

ティアナの言葉に三人は頷く

それを見たティアナの口元が僅かに上ずった

「それじゃ行くわよ・・・私達獣戦機を操る『獣戦機隊』の初陣

よー！」

『おおー！』

その掛け声と同時に四機は大地を疾走した

目指すは怪ロボットの現れた首都である

今、こうして四機のマシンが動き出したのである

第2話 結成、獣戦機隊（後書き）

次回予告

スバル

「遂に動き出した四機の獣戦機

でも戦闘慣れしてない私達は苦戦を強いらて大変

こうなったらあの時の形態にチェンジだ！」

次回超獣機神ダンクーガStrikers『獣の戦士』

やってやるぜ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2000q/>

超獣機神ダンクーガStrikerS

2011年10月7日03時13分発行